# 「撰集抄」論

国文学科四年　山口まみ

## 序

「撰集抄」は、「発心集」「閑居友」などと同様の仏教説話集の一つである。末法の世とされた鎌倉・室町時代は、数々の仏教説話集が生み出された。それらと同じくこの作品も、貴賤道俗を問わず、発心・遁世・往生に関する説話を列挙している。

しかし、この作品で注目されるのは、説話の中で解説・感想及び批評などといった付加的部分が、本文中において、かなりの部分を占めていることである。これは、話を話として伝えるはずの説話に、作者の観念が強く反映されている。いわば随筆的要素を多分に含んだ特異な説話集とみることができるであろう。「撰集抄」の作者は序に

同じ夢の中のあそびにも、親舊のかしこきあとを選びもとめける言の葉を書きあつめ、『撰集抄』と名づけて、座の右に置いて、一筋に知識にたのまむとなり

と述べている。これからは、一見説話を自分の後世のために、集めたかのように見受けられるが、付加的部分の多さとその内容をみても、作者の主眼が人々への教訓・啓蒙にあったことが窺えるのである。また、そこには作者の理想とする遁世像などが色濃く反映されている。

以上述べてきたことを踏まえて、「撰集抄」の説話形成の方法を探りながら、作者の最も言わんとする理想の発心・遁世・往生といったものを追求していきたいと思う。

## 第一章　「撰集抄」と「閑居友」の関わり

「撰集抄」の説話中には「閑居友」と同一原話を素材とした話、同一人物に関する伝承同趣向の文章など「閑居友」の説話と多くの類似点を見いだすことができる。

成立年代をみてみると、「閑居友」は承久四年（一二二二）に脱稿されたことが、下巻巻末から分かる。一方、「撰集抄」の成立年代は定かではないが、これにおくれる

とめける言の葉を書きあつめ、『撰集抄』と名づけて、座の右に置いて、一筋に知識にたのまむとなり

こと二十数年といわれている。この両書の成立年代からも、「撰集抄」が同じ仏教説話を取り扱った「閑居友」を読み、様々な影響を受けたであろうことは想像に難くない。

そこで以下、具体的に例を上げながら両書の類似点及び相違点を見ていきたいと思う。

### 第一節　類似説話比較

「閑居友」上巻第一話と「撰集抄」巻六第一話とを比較してみよう。この両話は、説話の内容から、その中で扱われている語句に至るまで、同じ箇所が頻繁に出てくる。「閑居友」では、主人公真如親王（出家する前は高岡親王という名）は、出家した後道詮律師のもとで三論宗を極め、弘法大師のもとで真言宗を学ぶ。しかし、真如親王は『法門、ともにおぼつかなきこと多し』という台詞を残して、唐土へと渡っていく。唐土には寂叡僧正と共に渡るが、真如親王はさらに天竺へと渡っていく。この部分は「閑居友」では

親王は、ものならふべき師おたづね給けるほどに、昔この日本の国の人にて円載和尚といひし人の、唐にとゞまりたりけるが、親王の渡り給よしを聞きて、御門あはれみて、法味和尚といふ人に仰せつけられて、学問ありけれど、心にもかなはざりければついに天竺にぞ渡り給ひにける。

二）に脱稿されたことが、下巻巻末から分かる。一方、「撰集抄」の成立年代は定かではないが、これにおくれるとあり、渡天の経緯や「円載和尚・法味和尚」と具体的人名まで出して真如親王の歩んだみちが詳しく書かれているのに対して

「撰集抄」の同じ内容を扱った箇所をみると、

…もろこしに渡り給ひけるが、是には明師もなしとて、天竺に渡り給へり。

と「閑居友」に比べて、いたって簡単な記述にとどまっている。

この後、「閑居友」では、真如親王が天竺へ渡る際に所持していた、三つの大柑子をめぐってのエピソードへと続いている。話の内容は、疲れ果ててやつれた姿をした者から物を乞われた真如親王が、大柑子を取り出して、その中から小さいのを与えようとする。すると、その乞食が、「どうせ同じものなら、大きい方をください」と言う。それに対して真如親王が「私は、この大柑子を持ってあてのない道を行くのです。あなたは、ここにとどまっているのでしょう。さしあたり、飢えを凌げば足りるでしょう。」と答える。その途端にこの乞食の様をしていたものが「菩薩の行は、そういうものではない。あなたは心が小さい。心が小さい人の施しは受けない。」と言ってかき消えてしまう。残された親王は、化人によって己の心を試されたのだと後悔する、というものである。このエピソードは「撰

集抄」巻六第一話では、

もろこしのみかど、渡天の心ざしをあわれみて、さまざまの寶をあたへ給へるに、それ由なしとて、みなみなかへし參らせて、道の用意とて大柑子を三とゞめ給へりけるぞ。

という記述にとどまっており、「閑居友」で扱われている大柑子をめぐるエピソードについては、触れられておらず、全く無視されているかのように見える。しかし、このエピソードと類似した説話を、「撰集抄」巻三第七話（瞻西上人之事）の説話に見ることができる。この説話では、大柑子が小袖に変わり、疲れた姿をした人が怪しい女に変わってはいるものの、物を乞われた主人公が、料簡の狭い所を示したために、「お前は心が小さい。心小さい人の施しは受けない。」と非難され、そのことに対して主人公が化人に自分の心を試されたのだと認識して、後悔する点は全く同じである。

では、なぜ「撰集抄」がこのエピソードを真如親王の説話から削除し、全く他の人物を題材とした説話へつくり変えたのか、という疑問が頭をもたげてくる。「撰集抄」作者は何らかの意図を持って、あえてこのように変更したとするならば、そこに作者の考えが表れているはずである。真如親王の説話からは削除したが、わざわざ他の人物を設定して、このエピソードを取り入れているということは、真如親王の説話中には載せたくなかったが、このエピソード自体は生かしたかったということであろう。この話は、真如親王という優れた人物が、ふとした瞬間に、人間の持つ、利己主義に陥り易いという弱さを露呈してしまった話であり、真如親王にとっては汚点を残したエピソードであるといえる。しかし、仏菩薩が姿形を変えて人間の心をたえず試しているという教訓的要素を多分に含んだ内容を持っており、仏教説話としては見逃すことのできない重要な事柄を指摘しているからこそ、「撰集抄」ではあえて、説話を創作してまでこのエピソードを取り入れているのだと思われる。つまり「閑居友」作者は、真如親王の素晴らしさも評価する一方で、この人物の持つ人間的弱さも容認しており、等身大の彼をありのままに読者に伝えようとしている。一方「撰集抄」作者は、彼をあくまでも俗世間に浸かっている自分たちとは異なる、純粋で崇高な資質を持った人物として強調したかったのではないだろうか。この後、両書とも真如親王の最期へと話は続いていく。また、ここでも類似部分と相違部分とがある。具体的にみると、「閑居友」では、真如親王の行方が分からないので、唐土に尋ねてみたところ、「天竺に渡り、その道中でなくなられたということを、かすかに聞いております。」という返事がき

真如親王の説話からは削除したが、わざわざ他の人物を設

て、初めて真如親王が死去していたことが分かった、と記してある。そして、先に記した大柑子のエピソードを挟んで

さて、やうやう進み行くほどに、ついに虎に行き遇ひて、むなしく命終りぬとなん。このことは、親王の伝にも見え侍らねば、記しいれぬるなるべし。

という記述で終っている。一方、「撰集抄」には、

さても、寂叡は帰朝すれども、ともなひ給へる親王は見え給はねば、もろこしへいきしを尋ね給へりける返事に、渡天すとて獅子州にてむらがれる虎にあひて、食ひ奉らんとしけるに、「我身を惜むにはあらず。我はこれ仏法のうつは物也。あやまつ事なかれ。」とて、錫丈にてあばへりければ、つひに情なく食ひたてまつると、ほのかに聞ゆと侍りけるに、みかどをはじめ参らせて、百の司みなたもとをしぼりけり。

という真如親王虎害説を詳しく説明した内容となっており、虎に遭遇したときの、真如親王の勇敢な言動が事細かに書かれている。

この二つの説話を比較してきたが、この中にも両説話集の作者の同一説話に対する捉え方・考え方の違いが明確に表れている。「閑居友」では、真如親王の出家した後の様子が淡々と書かれており、彼の生涯を記した伝記の一部のような印象を与えるのに対して、「撰集抄」では、真如親

いうことを、かすかに聞いております。」という返事がき

王が後悔することになったエピソードは全く削除され、逆に、虎に遭遇した際の勇ましい姿が強調されており、真如親王の偉大さ、素晴らしさを全面的に押し出そうとしている作者の意図が読み取れる。

次に玄賓僧都の説話について両書を見てみると、「閑居友」では上巻第三話に、僧都辞去、弘法大師からの消息、善珠僧正との交わりという三つの話をつないだ構成で、玄賓僧都の遁世隠徳の様が描かれている。そして、付説部には

…止観の中には「徳を縮め瑕を露はし、狂を揚げ実を隠せ」といひ、また、「もし、迹を遁れんに脱るゝ事あたはずは、まさに一挙万里にして、絶域他方にすべし」といへり。

という摩訶止観の教えからの引用があり、唐土の釈恵叡の隠徳を対比してあげ、さらに話部とは異なった方面における玄賓を

この玄賓の君の跡を見るに、ある時は奴となりて人にしたがひて馬を飼い、或時は渡し船に水馴れ棹さして、月日も送るはかりことにせられけん事、ことにしのびがたくも侍かな。「あきはてぬれば」と嘆き、「またはけがさじ」と誓い給けん心のうち、猶々やるかたなくぞ侍べきとして紹介している。一方、「撰集抄」では、玄賓を取り

上げてはいるものの、「閑居友」のように一説話の主人公としてではなく、他の人物を題材とした説話中に、貴き先例という形で名前が出てくる程度である。「撰集抄」では主に

山田もる僧都の身こそあはれなれ
　　秋はてぬれば問ふ人もなし

三輪の清き流れにすすぎてし
　　衣の袖をまたはけがさじ

とつ国は山水清しこと繁き
　　君が御代には住まぬまされり

の三首の歌から、語句を引用して玄賓を「昔の跡」として取り上げている。例えば、「撰集抄」巻一第八話（行賀僧都之事）では、『三輪』に行賀僧都が篭ったことから、『きよきながれにすすぎてし衣の色を又はけがさじの、玄賓のむかしの跡ゆかしく…』という形で玄賓のことを載せている。その他、巻二第四話（花林院永玄僧正之事）、巻五第十一話（永眼僧都背世之事）、巻九第十一話（覺英僧都事）などの説話でも、同様にして、和歌の一部を成句的に用いて玄賓が描かれている。そして、巻七第九話（信州義景宮仕僧事）では、「つぶね」となった玄賓や「みなれ棹さして」生計をたてた玄賓も登場する。そして摩訶止観の教えまで巻五第一話に出てくるところは、「閑居友」と「撰集抄」の密接な関わりを示しているようで興味深い。「閑居友」では、玄賓僧都について様々な角度から詳しく、その人物像に迫って描かれているのに対して「撰集抄」では、あくまでも他の人物を中心に据えた説話の中で、主人公を際立たせるための抽象的な理想的遁世隠徳僧として登場するにすぎない。

このような中世における代表的な遁世隠徳僧達に対する取り上げ方の違いは、空也上人の例においても顕著である。「閑居友」上巻第四話（空也上人、あなものさはがしやとわび給ふ事）では、まず空也上人の失踪から始まり、その後、市で偶然出会った弟子と空也上人との会話、そして北小路猪熊にある石の卒塔婆の言い伝えへと話は展開していく。いわば、空也上人の生涯を追っていくといったドキュメンタリー的な記述になっているのに対して、「撰集抄」巻一第六話（越後國志田上村之事）に見られる空也上人は、朝市に赴いた作者がそこで目にした情景から空也上人の昔を想起する、というかたちで出てくる。しかも、その部分は本文中

空也上人の、山陰の寂寞のとぼそを、物さわがしと悲しみて都の四條が辻の、さぞ物さわがしきに、是こそしづかなれとて、むしろこもにて庵ひきめぐらしておはしけん昔も…

て」生詰をたてた玄賓も登場する。そして摩訶止観の教え
まで巻五第一話に出てくるところは、「閑居友」と「撰集
という記述で、あたかも「閑居友」を要約したかのような内容である。この場合も前述した玄賓同様、貴き先例、「昔の跡」といった位置付けで、理想的隠徳僧として空也上人が描かれていることは明らかである。「閑居友」では、玄賓、空也共にその具体的な行為およびその理由を事細かに書き連ねてあり、そのこと自体を称賛しているのに比べ、「撰集抄」では両者の行為そのものをクローズアップするのではなく、全く別の人物の説話を載せたり、両者と関係のない情景の中で、本文中主体となるそれらを際立たせるための、比較材料として両者の行為なり、言い伝えなりを局部的に登場させるのである。いわば、効果的な対象像を登場させることにより、ピンボケする画面をより色彩の濃いはっきりした画面に見せようという目的を含んだ技巧的な導入であるように思われる。

以上、述べてきたように「撰集抄」と「閑居友」の説話を比較すると、同一人物を題材とした説話や同じ語句や章句を使用した文章、そして換骨奪胎を思わせる似通った説話の記載といったかなり多くの類似点を見いだすことができる。また、当時の末世観や天台覚思想、摩訶止観の教えに強く影響されているといった、思想的な共通点が多いことからも「撰集抄」が「閑居友」の影響を受けて書かれたものであることの証を呈しているように思う。

ん昔も…

## 第二節　「撰集抄」作者と「閑居友」作者の創作態度の違いについて

第一節では両書の類似説話を比較してきたが、これからその中で明らかになった両書の類似点・相違点を考慮に入れながら両編著者の創作態度の違いを探っていきたいと思う。まず、「撰集抄」巻六第一話（玄奘之事）と「閑居友」上巻第一話（真如親王、天竺に渡り給ふ事）について見てみると、両話は内容的にも、話の展開の面から見ても酷似しているが、その中で際立った違いとして大柑子をめぐるエピソードと真如親王虎害説の二点が挙げられる。大柑子をめぐるエピソードの持つ意味は真如親王を理想の先人として掲げる人々にとって、決して小さくはない。というのは、この話が真如親王の持つ人間としての弱さを露呈しているものだからである。「閑居友」ではそれを考慮に入れて、ありのままの真如親王の姿を描いたのに対して、「撰集抄」では、このエピソードについての詳しい記述を避けている。「撰集抄」の編著者はあくまでも、真如親王を偉大な人物として位置付け、読者に理想の遁世僧として印象づけようと意図していたことが読み取れる。そのためには、ある部分を削除したり省略したりという説話操作も厭わないという編著者の創作態度が見え隠れしているように思われる。ただし、この大柑子のエピソードは化人によって己

の心を試されるという教義的内容を多分に含んでいるためか、「撰集抄」編著者は見逃せなかったと見えて、巻三第七話（瞻西上人之事）で大柑子を小袖に変えて登場させているのである。つまり、重要な意義を含む部分については、多少手を加えてもきちんと活かすという編著者の姿勢を見ることができるのである。次に、真如親王虎害説についてみると、「閑居友」は四〇字程度の文章で簡潔な記述に留められているのに対して、「撰集抄」では虎に遭遇した真如親王が発した台詞から虎に立ち向かう勇敢な行動までも事細かに描かれており「閑居友」との大きな違いを見出すことができる。つまり、「閑居友」では、渡天説に話の中心が置かれているが、「撰集抄」では、渡天説から虎害説へと話の中心が移っているのである。ここにも、真如親王の素晴らしさをアピールしたいという編著者の考えが表れている。

これらのことから、「閑居友」編著者は史実に対して忠実に従う傾向があるのに対して、「撰集抄」編著者は自らが強調したい部分は詳細に描き、逆にマイナスになるような部分は削除する、そして、どうしても残したい部分は説話を新たに作り、導入するといった操作を厭わない創作態度をとっていると見ることができる。

次に「撰集抄」巻二第三話（播磨國平野云処遁世者之事）と「閑居友」下巻第一話（摂津の国の山中の尼の発心事）を比較してみよう。前にも記したように、前者は女の後世を弔うために出家して念仏する男が主人公の話であり、後者は夫を亡くして出家する女が主人公の話である。「撰集抄」は、女性を主人公とする説話は一二一話中六話であり、その内の四話は遊女に関する説話である。一方、「閑居友」は三二話中八話が女性を主人公とした話であり、その内容は遊女に偏っておらず、童から女房までと幅広く、数量的な割合の高さを見ても「閑居友」がある高貴な女性に献上するために作られたものであるという説も納得できるのである。これらのことも、両編著者の創作態度の違いを生み出す原因の一端を担っているといえる。同じく女性を扱った説話として「撰集抄」巻三第三話（室遊女遁世之事）と「閑居友」下巻第二話（室の君、頭基に忘られて道心発す事）がある。両話は同一人物を扱った説話であるが、各々の編著者の取り上げ方の違いは一目瞭然である。「撰集抄」は一人の尼を登場させ、その尼の昔を回想するという形で遊女時代の尼を述べ、現状に至るまでを描き連ねている。そのあらましも、遊女の出家以前に関すること、次に中納言頭基の船との出会いと遊女の出家に関すること、そして第三番目に遊女の往生とそれに続く中納言の伝というように、簡潔かつ明快な展開によって遊女のたどった半生に

次に「撰集抄」巻二第三話（播磨國平野云処遁世者之事）

いて描かれている。一方「閑居友」は、頭基が遊女を捨てるところから話が始まり、その後の遊女とその母の慎ましい生活ぶり、ひたすら念仏を唱える遊女の姿、そんな遊女に追い打ちをかけるかのような母の死と「撰集抄」にない部分が続く。それから遊女は泣いてばかりの毎日を送り、従者たちも散り散りになるというように、事態は最悪に陥る。折しも丁度その時、中納言の従者の船に出会い、髪を置いて去るという行為がなされるのである。そして、遊女はそのまま出家し、従者が事の次第を中納言に報告し、それを知った中納言は嘆き悲しむといった具合に話は描き進められる。同一人物を扱った説話でありながら、このような差が生じるのは、一重に編著者の目の置き所が異なっているからに他ならない。「閑居友」は、女性が異性に捨てられ、悲惨な境遇に陥ったにもかかわらず、それらを越えて仏道に励んだということを「撰集抄」にはない長々とした文章を挿入することによって、効果的に読者に印象づけている。一方、「撰集抄」は、この主人公である遊女を賞賛してはいるものの、出家・往生の一例として取り上げているにすぎない。そして、話の重点は最終的な往生に置かれているといえる。

さて、この尼は明暮、念仏し侍りけるが、つひに本意のごとく往生しき

に、簡潔かつ明快な展開によって遊女のたどった半生につという文章は、「閑居友」には見られない部分であるが、「撰集抄」編著者にとっては、罪深い遊女がひたすら念仏し、その結果立派な往生を遂げたということのほうが、重要なのである。「撰集抄」では、他に漁師、商人、侍、翁とさまざまな階層の人々を含む一般庶民を主人公とした説話が多い。「撰集抄」編著者にとって、女性に偏らずこれらの多種多様な人々を教え導くことは、編著者の主眼となって、「撰集抄」における創作態度に表れているように思う。

## 第二章　「撰集抄」の説話のもつ特性

### 第一節　語り手内在の説話について

「撰集抄」について、まず問題となるのが編著者の確定である。古来、その編著者は西行法師であると信じられてきたが、現在では、先覚の諸研究により、西行自記でないことが次々と立証され、作者不明の西行に仮託された説話集であることが認められている。

「撰集抄」は九巻一二一話からなる説話集であるが、その中に語り手西行が内在している説話が二三話存在する。

そして、この語り手内在という点で忘れてならないのが、「撰集抄」は西行仮託の書であるということである。そのための工夫が、本文中に出てくる歌を検討すると明らかになる。巻五第十四話（西行参詣春日社事）に

山里に浮世いとはん友もがな
　　くやしく過ぎしむかし語らん

津の國の難波の春は夢なれや
　　蘆の枯葉に風わたるらん

という和歌が出てくるが、これは当然西行の実詠歌であり、それぞれ「新古今集」巻十八と巻六に所収されている。巻九第八話（江口遊女歌之事）で詠まれた。

世の中をいとふまでこそかたからめ
　　かりの宿りをおしむ君かな

の和歌も同様に「新古今集」巻十に西行が詠んだものとして収められているものである。その他、説話中に登場する人物と語り手との間に交わされる連歌の多さを見ても、歌詠み西行を意識した編著者の考えが読み取れる。

難波人いかなる江にかくちはてん　西行
あふ事なみに身をしづめつゝ　西仙上人

（巻六第四話西上人之事）

の連歌は、実際は「新古今集」に収められた和歌を編著者が西行と西仙上人との連歌に変えて、文中に取り入れたものである。このように、諸国を遍歴する中で、連歌を通じて人々との心の交流を図っていく語り手の姿が、意識的に描かれているのである。これらは、連歌作品も多く残し、「新古今集」に九四首という最多の和歌を採録された歌僧西行のイメージを巧みに利用した説話形成の方法であるといえる。

## 第二節　「撰集抄」における類似説話比較

「撰集抄」の中には、説話の構成や表現上の点から見て、類似する説話が存在している。

そこで関連性をもつ二話の説話について比較検討してみる。巻四第三話（由良西道発心因縁之事）と巻六第四話（西山上人之事）を見てみると、この両話は主人公が共に漁師であることが分かる。まず、巻四第三話を見てみると、西行らしき人物が紀伊國由良の岬を過ぎているとき、五十ばかりに見える男が船の中で泣いているのを目撃する。その理由を尋ねると、この男は「たった今大きな亀を釣り上げて殺そうとすると、この亀が両眼から紅の涙を流して嘆くので、あまりの悲しさに元のところへ戻そうとした丁度その時、連れの釣り人が、その眼を刀で突いたため、亀が苦しみ悶える様子が、あまりにも身にしみて、哀しく思っているのです。」と打ち明けるのである。そして、男はその場で出家を願い出て、作者により剃髪してもらい、そのまま都に上る。そして、西仙上人の庵で修行し、立派な後世者となるのである。ここで注目したいのが、西仙上人という人物である。いきなり、西仙上人という名が出てくるのが、不思議な気がするのだが、実はこの人物は巻六第四

「新古今集」に九四首という最多の和歌を採録された歌僧話に登場している。巻六第四話では、西山の西住上人を伴った西行らしき人物が難波の辺りで釣りする翁と連歌を詠む。これが縁となり、西行・西住は翁の家に泊まることになるのだが、この翁は自分は山陰中納言の子孫であること、今現在に至るまで出家することを考え続け、五十という齢に達してしまったこと、作者等の様子を見て、出家の決心が固まったと話す。そこで、作者等は彼を行住と名づけ、立派な後世者となすのである。その後、彼は都に上って西山の麓に庵を結び、西山上人として名を知られるようになる。ここで出てくる「西山上人」という名は、書陵部本、慶安三年整版本では「西仙聖人」となっており、巻四第三話の「西仙上人」と同一人物であることが推測される。

ここで、今一度巻四第三話を振り返ってみると、西行が釣り人を（後、西道と呼ばれる）を西仙上人の庵に連れていった場面で、西仙上人が語った言葉として、以下のような部分があることに気付く。

……「あはれなることかな。境は南西にかはるといへども、かれも釣人我も釣人なるあはれさよ。是におはせよ……

これを見れば分かるように、西仙上人はかつて自分も釣人であったことを述べている。その上、「境は南西にかはる」という部分も、「南」が「紀伊國由良」、「西」が「難波」のが、不思議な気がするのだが、実はこの人物は巻六第四とすれば、地理的にも一致し、この二話の結びつきがはっきりしてくる。ただし、この両説話の関連性を作者が読者に印象づけようとしたとは到底考えられない。というのは、巻四第三話と巻六第四話は、説話配列を年代順に考えるならば「西仙上人」が一釣人から出家して「西仙上人」となるまでの経過を扱った説話である巻六第四話の方が巻四第三話より先にくるべきであり、配列順が前後したこの両説話を、読者がすぐに結びつけて考えられるとは、あまり期待できないからである。このことから、作者の説話配列に対する考えは、年代順という点には全くとらわれていないと思われる。

しかし、このように一見無関係のように感じられる説話間にも密接なつながりがあり、関連性を秘めていることは、「撰集抄」における特徴的な説話創作の方法とみることができるであろう。そして、この方法をとって語られる説話の主人公は、漁師や遊女たちであり、最も救いの少ない罪深き者達なのである。この罪業にまみれた生きざまを強いられた人々の、救済への切実な願いと、その発心の機縁をもたらす出家者との関わりは、この説話創作の方法により、繰り返し読者の目に触れ、確実に印象に残る形をなっている。ここにも編著者の主張が込められているように思う。

だ随筆的なものへという移り変わりは「閑居友」からの流れを汲んだ時代的背景の表れであると同時に、西行を偽装した編著者の努力の表れでもあったと言える。

## 結び

以上、主に「閑居友」における説話と比較検討したり、また「撰集抄」中における説話同士を比較したりなどして、一面的ではあるが、「撰集抄」に考察を加えてきた。

その中で言えることは、「撰集抄」は隠徳僧達の姿に代表されるように、摩訶止観の教えの流れを汲んだ「閑居友」の影響を、同文の語句、文章ということに留まらず、様々な形で受けているということである。

次に、「撰集抄」の作者が西行であるということを読者に印象づけるために、「撰集抄」編著者は内容を西行に返還せねばならなかったという点において、西行の影響を受けていると言える。そのために、美文調の文章が目立ったり、文章が技巧的であったりという欠点はあるものの、西行という人物像を背景に作品を見る読者にとっては、説話の内容及び編著者の評語が記された付加的部分に対する抵抗もなく、読まれたということが言えるだろう。

「撰集抄」の持つ多くの特性は、この仏教説話の位置付けをも端的に表していると思われる。説話を羅列するだけに留まらず、編著者の感慨、評語、自省の言葉などを多分に含んだ付加的部分の著しい増加も、その一つと言えるだろう。単なる説話集から、編著者の観念が大いに入り込ん